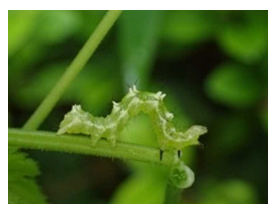


早い成長

1. ウリキンウワバの幼虫

公園や日当たりのよい場所に生育するつる草のカラスウリは、キュウリなどと同様にウリの仲間ですから、畑でウリ類を栽培するときに害虫と呼ばれる昆虫が利用して生活しています。ウリハムシはもっとも多く見られますし、ノギリカメムシというウリに依存する昆虫等もあり、打吹山が畑への供給源といえるかもしれません。(No.66 ウリハムシとウリ 参照)

ウリキンウワバは、ウリ以外も食べるガですが、ウリの害虫として認められているため、その名が付けられました。幼虫が葉や柔らかい新芽を摂食します。右の写真の幼虫は7月30日と8月2日の同じ個体です。孵化後脱皮のたびに模様や形が変わります。2齢幼虫は黒い斑点が多く、斑点から毛虫らしく黒い毛が出ています。3齢になると黒い斑点が消えてしまいます。終齢では背側の大きな棘状の毛の生えた突起になります。成長も早く、脱皮ごとに大きさが増し、2週間で蛹になります。写真でカラスウリの茎の太さを基準に比較してみてください。1ヶ月で次世代が出現するスピードで世代



ウリキンウワバ幼虫
上：1齢 下：2齢

を重ね、個体数が増えますから秋には被害が大きくなります。

打吹山ではカラスウリの数は限られていますが、畑では好物が大量にあるため大発生となり、害虫と名前をつけれることになるのです。同じ作物を大量に作るのが農地です。農地が害虫を作るのです。自然界には害虫はいなくて、食うもの・食われるものバランスをとって生きています。



2. マンネンタケの成長

サルノコシカケの仲間は、枯木や切り株、生木にも生えてきます。打吹公園のサクラにはツガサルノコシカケがよく見られますが、切り株にマンネンタケ発見しました。

マンネンタケは薬用として有名ですが、広葉樹の枯死木にも生木にも生え、つかみどころのないキノコです。生木でも内部の木材部分は死んだ組織ですので、枯死木と同じです。そこで増殖した菌糸が胞子を飛ばすため、外に出現するのがキノコ(子実体)です。

シイタケなどは胞子を作ってから外に出て膨らみ、2日くらいで傘を広げてしましますが、サルノコシカケは菌糸が外に出てキノコ状に増殖します。先端部分は細胞分裂して成長している菌糸ですので、白色をしています。成長した菌糸が、種それぞれの特色ある物質を分泌して細胞壁を硬くします。

マンネンタケの出始めは、棒状で白い先端です。やがて、傘のように広がるのですが、半円状になります。木材と同じ成分を分泌するため硬くなり、表面は光沢を帯び、まるでコルクの樹皮のようになります。写真の個体は水分がなくなると、傘の長径7.3cmで、非常に軽いものでした。



ツガサルノコシカケ



マンネンタケの生長